

この秋、映画やドラマになった原作本を紹介します！

〈映画〉 『図書館戦争』 有川浩 著 角川文庫 B913-ア-1~6

公序良俗を乱す表現を取り締まる「メディア良化法」による、行き過ぎた検閲から本を守るための組織・図書隊。憧れの王子様を追い、入隊した女の子の成長と表現の自由をめぐる攻防。

〈映画〉 『グラスホッパー』 伊坂幸太郎 著 角川文庫 B913-イ

殺された妻の復讐のために裏社会の会社に潜入した男、自殺専門の殺し屋、ナイフ使いの若者。三人の登場人物が交互に語り手を務め、展開していくハードボイルド。

〈ドラマ〉 『無痛』 久坂部羊 著 幻冬舎 913.6-ク

外見だけで症状がわかる能力を持つ医者が連続殺人鬼を追いつめる。無痛とは？刑法 39 条（心神喪失及び心身耗弱）をテーマとした小説。

〈ドラマ〉 『下町ロケット』 池井戸潤 著 小学館 913.6-イ

研究者の道をあきらめ、家業の町工場を継いだ主人公。営業赤字や特許訴訟など苦難が続く。ある部品の特許に食指を伸ばす大企業との駆け引き。ロケット開発という自分の夢への挑戦は如何に…。

～今月の名言～

いいか、お前らを助けるために艦長が死んだんだ！
艦長の代わりに助かったお前らが勝手に死ぬ権利はこの艦の中にある限り一切ない！

『海の底』 有川浩 著 角川文庫 P.387

☆図書委員からのオススメ☆

『スカイ・クロラ』 森 博嗣 著 中公文庫 B913-モ-1

ボウリングの「ボールの穴から離れた僕の指は、今日の午後、二人の命を消したのと同じ指なのだ。僕はその指で、ハンバーガも食べるし、コーラの紙コップも掴む。」

『すべてが F になる』などミステリー作家として有名な森博嗣の作品です。

世界の戦争が企業によって行われ、商品とされる世界で、永遠に生き続け殺し合う存在「キルドレ」。

主人公のカンナミ・ユーヒチもクサナギもトキノもみんなキルドレです。大人の都合によって殺し合いを決定づけられる彼らは何を目標に生きているのかわからず、無意識のうちに自分の死を想像しています。出撃の度に誰かが死ぬかも知れないそんな生活を日常と認識し、ただ過ぎていく日常を淡々と受け止めていく子供（キルドレ）たちの物語です。

この作品は繊細な飛行機の描写や、ことあるごとに出てくるジョークが印象的です。

飛行機の描写は自分の右手の感覚にユーヒチの右手の感覚が流れ込んで来るような錯覚を覚えます。コクピットに乗り込むユーヒチの感情も感じられます。また、自分たちの境遇をジョークで表現している姿からは一種無常観ともいべきものを覚えます。

普段皆さんが読んでいる作品とは違う切り口を持った作品です。ぜひ一読を。